豊後風土記の「打猨・八田・国摩侶」

富来　隆

豊後風土記にみられる記事の内容が、出雲や播磨のそれとは異なって、日本書紀の記載するところとすこぶる似かよっていることは、すでに周知のとおりである。[1] これをどう解するかは、いまは問わないでおこう。

景行天皇の九州征討にさいして、とくに豊後の直入県の禰疑野（ねぎの）に三人の土蜘蛛を討ったことが見える。すなわち、一に打猨、二に八田、三に国摩侶と記されている。

これについて、永年のあいだその疑を決し得ないでいたが、此頃になってようやく私としての解答を得たような気がする。しばらくこのことを述べてみたい。

三人の土酋たちのうち、まず「打猨」とはウチザルと読まれるのであり、サル＝猿のことであろう。別府湾岸にそそり立つ高崎山（大分市）のサル群はいまや世界的に有名になったが、おそらく山中部には数多く群棲していたことであろう。そして今日でも猟師たちはサルを鉄砲でうたないというし、これを神としてあがめることの多い点からしても、打猨とはサル族の呼び名だとしておそらく間違いないだろう。

つぎに「八田」とあり、ヤタと読ませてある。各地に多く存する八田の地名が、「矢田」と同じくヤタと読むのであることはそれでよいとして、西日本の方言からいうならば正確にはヤアタと読むべきであろう。一・二・三……七・八のよみ方がヒイ・フウ・ミイ……ナナ・ヤアとされることや、また関西では木をキイ、蚊をカア、巳をミイとよぶこと、このように引きのばして発音することからすると、「八田」とは本来的にはおそらくヤアタの宛て字であったと考えられる。そして、

打猿がサル＝猿であったのに対して、このヤアタというのはおそらくヤアタロのことであって、ヤアタロ＝青大将（蛇）のことを指すのではあるまいか。

これはまた、常陸風土記などにも見られる『夜刀の神』（ヤト）、あるいは地名などの「八戸」（ヤト）とも同じであろう。ヤトの神、ヤアタロ神とは青大将の蛇のことを指すのであって、今日でも一般に青大将ヤアタロは（ほかの蛇に対するのとは違って）これを神として、あるいは神の使いとして、殺さない習俗がのこっている。それどころか家の主（ぬし）としてあがめる風習がつよく存するのである。八田とはヤアタ、すなわちヤアタロであり、青大将（蛇）の呼び名としてよいであろう。

ところで、さいごに「国摩侶」とはいったい何をいうのであろうか。マロと呼ぶような人名（男子の呼称）を用いていることからすれば、これは確かに人間のようでもある。

だがはたして国摩侶を人名だときめてしまえるであろうか。「打猿・八田・国摩侶」と並べて記されている点から考えてみた場合、サルやヘビなどと並んで、神として（あるいは神の使いとして）あがめられ祀られる動物にはどんなものがあるか。しかも動物にたいして、ふつうに人名をつけて呼ぶものは何であろうか。右の二点を満すものは？　そうだ、これはイヌにちがいない。そして日本神話のなかにも隼人・狗人（いぬひと）の伝承がのこっているではないか。

記・紀に見える大和朝廷による各地の征討が、土酋たちをさしていろいろと動物の名などを用いて蔑視することは、このことだけに限って言えば、未開・古代の世界の何処にも普遍的（へん）にみられることである。それはそれとして、豊後国・直入県の禰疑野（いま竹田市菅生の地方）における三人の土酋たちが、その名をサル・ヘビ・イヌという動物たちだとされていると考えてみると、これはまた特別に興味がわく。

現在でも東南アジアの各地（ことにインドシナ半島の）村々における祠堂のなかに、自分たちの祖先神としての人身像のほかに、サル・ヘビ・トラ（虎）の三つが神とまつられているものが多いという。豊後におけるサル・ヘビ・イヌという三つは、そのなかのトラがイヌにかわったというだけである。日本には虎がいないからでもあろうが、なおこれらの動物たちを神とし

て崇める習俗の残存とも深い関係のあることを示しているのではないだろうか。

ここに一つの問題がある。現在でも猟師たちはサルを殺さず、あるいは神のごとくに怖れる風習があり、そこには日本神話における猿田彦の物語りや、岩見重太郎のヒヒ退治の話などにものこっている。いま大分市内の一木（旧北海部郡丹生村のうち）では、仏壇のうちに祀っていた例がある（佐藤田鶴雄氏、写真参照）。またヘビを神としてあがめる風習、そのなかで青大将ヤアタロは家の主とされており、神の使いであるとして絶対に殺さないことは、今日も強くのこっている。

これに対して、イヌの場合にはすっかり家畜となっていて、神としておそれたりあがめたりはしない。それどころか名前をつけてよぶのが一般である。

ヘビの場合にも名前がある。一般に豊後では青大将をヤアタロ（弥太郎）とよぶようで

あるが、マムシについてもセイジロ（清次郎）とよぶことが山国川の地方で知られている。（大分大学黒瀬教授の御示教による）。また国東から別府湾岸にかけて崇められるコイチロ神（小一郎）なるものも（日出町・佐藤悌・同暁父子の研究がある）、その様態からみて弥太郎神の息子らしい性格をもっており、若宮信仰のようにも思われる。しかして白ヘビの信仰は（名称のことは別として）ことに広く一般にひろがっているようである。――この点からすると、豊後風土記の景行天皇の九州征討にさいしての、速見郡の鼠ノ石窟にひそむという「青」と「白」の名も、ヘビ族のことではなかろうか。(2)

このようなヘビの呼称は、その種類により、地方によって、特定した（固定化した）呼称となっている。

これに対しイヌの名前は、今ではそれぞれの飼主がかってに付けている。それはヘビの場合とは全く異なるように見える。しかし面白いことに、漁師たちが自分の持船に対して○○丸として人名的な呼称をつけるのとよく似ている。船にあってはその船首ちかく「目の印」が画かれ、(3)また船霊（ふなだま）さまを祀り、○○丸という名前で呼ばれるのである。それは擬人化して考えられているが、じつは神格化したものというべきであろう。これに似たものとしては、古来の名剣とされるものにも見られる。とくにすぐれた刀剣において、名前をつけられていることが多いのである――これも一種の神格化であろう――。このようなことを考えてみると、イヌの場合にもおそらく同様であろう。私たちが勝手に愛称をつけるという安易なものが本来的ではなく、その昔にさかのぼれば恐らく「船」や「刀剣」などに対すると同様に、イヌ族を尊いものとしてあがめていたことの名残りではなかろうか。

これらの動物たちが、すでに古く神々としてまつられるとともに、あるいは今日なお憑きもの・たたり神などとして怖れられ、活動していることの著しいものがある。それについて石塚尊俊氏によると、サル神は瀬戸内海の島々に点々とのこっており、ヘビ神とイヌ神とは瀬戸内海をとりまく周辺の中国・四国・九州に多いという。すなわち、犬神の「分布は四国一帯から、中国ではおおむね西半分、九州では主として東部に多いが、少しは種子島あたりにもある」という。これに対し、蛇神の「分布はやはり四国の一帯から、中国では主として山陽の一帯におよび、九州は比較的に少ない。」（『日本の憑きもの』21頁）。

また「憑きものの呼称による分布図」（同22～23頁）によってみると、ヘビ神の九州における分布は、豊後沿岸に印がつけられている。そして蛇神と犬神とが、ほとんどその分布地域を重複しあうように、主として瀬戸内海の周辺地帯に濃厚に見られること、ここには猿神の存在も残っていること、これはきわめて印象的である。

ところで国東半島における犬神の伝承と、豊後水道域（海部）から大野郡にかけてのその所伝とが、すこぶる趣を異にしているのは面白い現象である。すなわち、国東・速見の地方には、生きながらに首だけ出して埋めた犬の、飢えていよいよ食物に眼の色がかわったころ、その「飢えた犬の首」をきって祀るとされている。これに対して、海部・大野の地方では、小さな鼠位の大きさの、尾が3本分れた白黒のブチの犬を、カメに入れて床の下に蔵って養なうとされるのである。しかもその所伝として、「むかし弘法大師が中国南部に渡って、帰るときに付いて来て、大師が向う脛にかくして持ち帰った米粒をくわえ出してバラまいて歩いた。それから日本に米作りがひろまった」という話がのこっている。また大野郡の地方ではむしろ庄屋とか酒屋・物持ちといわれる家柄に犬神もちのすぢが多くて、それは祟り神というよりむしろ幸い神の色合いがあることは、さきの犬神が本来的にはやはり神として尊ばれていたらしいことを合せ考えるとき、たしかに注目してよいことと思われる。そしてこのことは蛇神の場合にもみられるが、こちらは呼称がかわっているときにもみられるし、種々の場合がありながらやはり祟り神と幸い神との二様が存するらしいのである。

日本の古代社会における蛇神の尊信は、おそらく東南アジアの諸地方のそれと一脈相通ずるものがあろう。というよりも、それからの伝播である可能性のほうが強い。そして、あるいは犬神もまた左様なのではなかったかと思われる。ただ蛇神については、その神的な存在は厳然として記録にものこっており、信仰上からもはっきりと認めることができよう。歴史時代に入っては、緒方惟栄らの祖とされる大神惟基が、祖母山の大蛇神と通婚した物語りで名高い。平家物語や源平盛衰記に記されていること、らみれば、当時すでにすこぶる世評に高かったものであろう。惟基の名をアカガリの大弥太と称したことは、これも弥太郎（ヤアタロ）神の申し子であったことを示していようか。

当地にこれに類した犬神の物語りは見当らない。しかし、民俗・伝承ではあっても、犬神の分布域が蛇神と重なりあうように瀬戸内海をとりまく地方にひろがっていること、猿神の分布もまた見られること、そして北九州から瀬戸内海の沿岸の地方こそは日本神話の地域であり、神々の活躍した舞台でもあった。これらの点からして、景行天皇の征討にさいしての直入・禰疑野の「打猨・八田・国摩侶」をサル神・ヘビ神・イヌ神族たちの首長として考えてよいのではなかろうか。

〔註〕

(1) 例えば、上田正昭氏「古代王朝と巡幸伝説」(『日本古代国家成立史の研究』所収)など。

(2) 蛇神のことについては、拙稿「日本古代の海部＝蛇神について＝」(『金関丈夫先生古稀記念論文集』所収)にも詳論した。

「青と白」については、長崎市諏訪神社のオクンチに「青蛇・白蛇」が、金の珠を追っかける祭儀を想い起させるものがある。

(3) 「船の目」の分布は、エヂプトからインドにかけての地方をはじめ、カムボジャ・メラネシャなど太平洋域から北アメリカにまで及んでいるという。中国のジャンクはもとより、台湾・沖縄・日本などにも存する。大分県でも国東・姫島などで見かけられる。

船首に「目」の印が画かれるだけでなく、エヂプト・インドなどで聖舟を"竜"とする観念は、日本でも竜頭鷁首の船とか、竜骨などの語のうちにみられる。」

〔あとがき〕この地方に、何故このような強大な土酋勢力が存し得たのか。これの地政学的な、また経済社会的な考察にも及びたいつもりでいた。体調がよろしくないため、尻きれトンボの形でおわったうえ、民族学的考察もきわめて不十分なままのことを深謝したい。

―――― 42・7・10 ――――